

## 論文内容要旨

論文題名：ボツリヌス療法（BoNT-A）の脳卒中瘳性片麻痺歩行に及ぼす効果について

掲載雑誌名：昭和学士会雑誌 第76巻 第3号

内科系リハビリテーション医学専攻

氏名：柳澤志満子

ボツリヌス療法（BoNT-A）は瘳縮治療として用いられるが、施注後の歩行改善に関する足圧接地足跡解析などを用いた客観的評価報告はない。今回、我々は BoNT-A 前後の瘳性歩行の変化を機器を用いて客観的に評価した。対象：脳卒中患者 16 名（脳出血 10 名、脳梗塞 6 名）で、裸足歩行可能な患者を対象とした。麻痺側下肢瘳縮筋（腓腹筋・ヒラメ筋・後脛骨筋）に合計 200～300 単位の BoNT-A 製剤を施注し、施注前と後(1 ヶ月後)に、シート式足圧接地足跡計測装置（ANIMA 社製）を用いて、対象者の歩行を計測し、歩行速度および歩行周期における立脚(St)・遊脚 (Sw)・両脚支持(Ds)期の割合を測定した。施注後歩行速度が低下した群 7 名（速度低下群）、歩行速度が上昇した群 9 名（速度上昇群）について、歩行周期における各要素 St・Sw・Ds 期の割合を比較した。解析は t 検定にて行い、危険率 5%未満を有意とした。速度低下群では患側の St 期が増加、Sw 期が減少、Ds 期が増加したが、速度上昇群では患側の St 期が減少、Sw 期が増加、Ds 期が減少した。速度低下群は、瘳縮依存の歩行のため、BoNT-A による急激な瘳縮減弱により、患肢支持が不十分になり Ds 期が増加し速度が低下したと考えた。一方、速度上昇群では瘳縮減弱により、St 期の患肢足関節の動きが円滑となり、Ds 期が減少し速度が上昇したと考えた。歩行周期に上位中枢の介入がある可能性も考えられた。BoNT-A 後に機器を用いた客観的評価を行なう事で、問題点が明確化し、適切なリハ訓練を行うための指標となる事が示唆された。